

研究機関

ところどころ

正 田 裕 雍

どこの地方に行つても、かならず珍しい話とか、伝説、或いは変つた風俗習慣があり、昔から「ところ変ればしな変る」と云われる通りである。又10人10色と云われるように、それぞれ人によつて顔の造作が相異り、その考へ方も違つているものである。各地の研究機関、教育機関にも同じように、それぞれ特色があるのは勿論であるが、各機関が現在おかれている状態に対し、それらを構成する個員が、程度の差こそあれ、多かれ少なかれ、種々雑多な意見を持ち、不平不満がある。これはとりもなおさず、各機関の改善、進歩発展を願うためであり、そこに特色が表現されて来るものでないかとも考えられる。そういうことはさておき、私が昨年2、3の研究機関を見学する機会があつたので、私なりにそれら機関で受けた印象を書いてみることにする。

先づ最初に国立農業技術研究所であるが、我国有数の温泉地の一つで、尾崎紅葉の小説のお宮、貫一で有名な熱海をすぎて約1時間で、東海道53次で名高い平塚に到着する。平塚市はこの沿線では、かなり大きい街で、札幌のようなビルデングこそないが、狸小路のような商店街が並び、夕暮近くなると物凄い活気を呈していた。この市街の西方郊外に、丁度ハイヤーで15分の

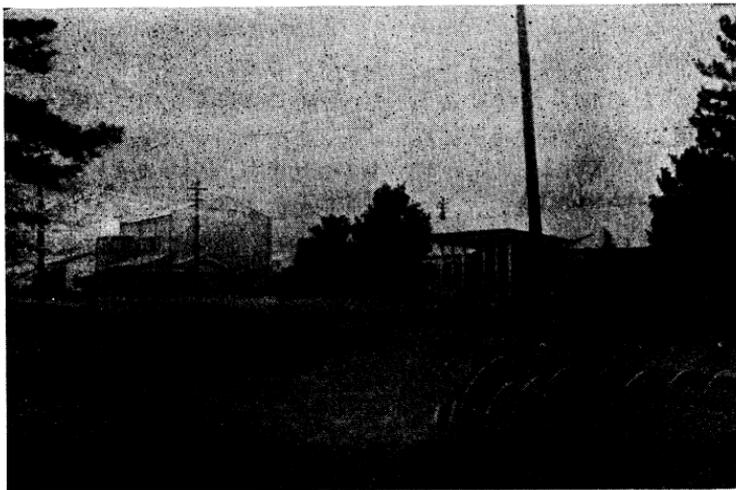
ところに研究所があり、広大な敷地を持つ閑静な、そして遙かに富士山が眺められる絶好な場所である。この研究所の隣りには横浜ゴムの平塚工場、向い側にパイロット万年筆、インキのモダンな工場があつて、所謂平塚市の工業地帯の真中に、完全に畑違いの研究所があるわけである。どうして土地の悪いここに研究所が建てられたかと云うと、戦時中実は軍部の火薬工場であつたのを、そのままゆづり受けて使用していると云うことで納得することが出来た。成程ここの建物は実に奇妙な恰好をした鉄筋造りで、それが1ヶ所にかたまることなしに、爆発の危険を防ぐためか？空襲を恐れてか？広大な敷地のあつちに数個、こつちに数列という具合に散らばつて建てられていた。それらの奇妙な家々が、各研究室と職員住宅になつていた。先づ研究所の門を入ると直ぐ守衛の詰所があつて、そこで来訪の目的、誰に会うか、そして署名をさせられる。このような検門所が数ヶ所あつて、部外者は絶対に許可なく入所することが出来ないようになっていた。ここに勤めている職員の大部分は、この中に住宅があつて、市街から通つている者は数えるだけだそうだ。正面には所長室、会議室、図書室がある「講堂」、庶務、会計をしている「庶務」、職員組合の経

営する『購買』及び職員住宅、研究所の一部だけが後で増築されたようである。果樹栽培、園芸、工芸作物、遺伝、育種その他の多くの研究室が独立しているために、四囲のわづらわしい雑音から解放され、静かに研究員が各自の研究に専念出来ることは、実に幸せで、羨く感じた次第である。各研究室には室長が1名、その外に数名の研究員が配属されていて、研究に対する責任は完全に室長にゆだねられている。

この研究所は三島にある国立の遺伝研究所の如く純粋科学だけをやるのでなく、純粋科学と応用科学との両方を実際に生かしている研究所

であるので、国立の研究所としては遺伝研に次ぐ第1級のものであつて、国家からもその存在を高く評価されているから、責任が重いと云つていたし、又非常に忙しいらしい。そのために研究者としては、かなり矛盾を感じているらしく見受けられたが、私のような部外者にはわからない行政官庁との難かしい問題やら不満もあるようにうかがわれた。私が上述の各部門の中で、

特に興味をもつたのは、穀類、野菜類の種子に同位元素を使用して品種改良をおこなつて実績をあげていることであつた。もともと品種改良にX-rayを使用することは知られていたが、その結果は、多くの奇型を起すので駄目であるとされていたのである。それではロスの少い品種改良を行うには、どうするかと云うと、簡単に稲を例にとるならば、ここに背丈の高い実の大きい収量の少ないものと、丈の低い実の小さい



平塚にある国立農業技術研究所正面，中央は図書室，会議室，右側は研究所の庶務・会計係が入っている建物

収量の多い形質を持つ品種があるとする。これから丈の高い実の大きい収量の多い品種を作る場合、各々の形質を持つ種子を植えて交互に人

工授精を行ひ、それからできる種子に色々のものが出来る。その優性な因子をもつものだけを植えると云う具合に数回繰返して、品種を固定する方法を用ひたわけで、能率も悪く面倒だし、年月も多くかかるわけである。ところが、ここにある機械で、色々のフィルターを用ひて種子に放射線を、実験の目的に応じて実験材料の種子に照射する、すると奇型も出来るが、中に長所

ばかりを持つ品種が出来るわけで、研究も簡単に、その年だけでわかるので極めて有効な方法である。要するに人工的に突然変異を起して品種改良をすることが出来るのである。更に吃驚したのは、標本の中に、このようにして出来た稲で、収量が倍以上になり、1個の種子も大きいのやら、サツマイモの皮の半分が完全に白く、半分が赤い色をしたものさえ出来ることが分つた次第である。この機械は現在、こ

この研究所と東海水産研究所に一つずつあるので、今後は研究の洋々ることもうかがわれた。こんな事から新しい品種

も卵に照射して作られるような気がしたし、鮭の標識放流の研究にも使用出来そうだったが、可能性がないわけではないが、鮭は放射能をもっている内には食べられないので、危険を伴うし、又このような莫大な金額の、大きな機械をそうあつちこつちにおかれぬ事や、植物と動物では随分効果が違うから、そう簡単にはいかないし、難かしいのではないかと思われた。この研究所の労働組合は、実に活動的で、

現在までに、購買部と毎週木曜日だったと思うが、午後の3時からフリーな時間にすることを獲得して、組合員の厚生と親睦をはかつていた。その自由時間は各自がテニスや野球をしたり、或いはコーラス、会合等をして愉快地楽しんでた。尚又ここでは余り住宅難の話は聞かなかつたから、恐らく組合が大きい問題として重視しているので、各自の生活は心配ないのではないかと思つた。次は淡水区水産研究所



淡水区水産研究所の水族飼育室及び飼料室、手前に一寸見えるのが実験池（上野氏の好意による）

であるがこの研究所は水産庁に属する8海区水産研究所の一つであつて我国内水面利用研究のセンターとも云えるところである。新宿

から私鉄京王線で約40分で、中央線立川市に近い高幡不動尊で有名な、高幡不動駅に着く、そこから10分たらずで川があり、その橋を渡ると、低い門と標札が目につく、門を入ると、矢張り守衛室があつたが、誰の姿も見えないのでどンドン入つて行くと、内水面のセンターとしては粗末な四棟の建物が、正面と左右に、大体コの字型に建っている。それで研究所としては一寸意外な感を抱いたが、この研究所も、

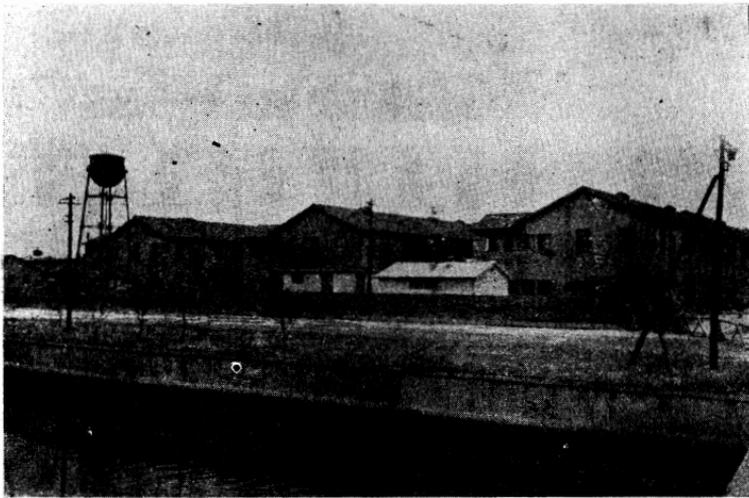
もとは人工石を造っていた工場とかの話であつた。それでも今年正面に、現在の水族飼育室の前に立派な研究所を建てて面目を一新するとのことであつた。コの字型の正面から見て右側の棟には所長室、事務室及宿直室があり、中央に水族室飼育室と餌料室があつた。この建物は西洋式でとても綺麗なもので全く羨しかつた。更に右側の棟が研究室になつていて、その中に湖沼、河川、増殖、環境その他2、3

の研究室があるが、見た処少し狭いような感じで、これでは充分な実験、研究も中々出来ないように

思うと共に、そのためにも早く、大きい研究室が出来ることを願わずにはいられない次第である。しかしその中でも、小さい水槽をならべて、淡水魚の産卵生態を観察され、面白い研究をしておられた。私の記憶では、元々この研究所がこの地に移転する前には、東海区水産研究所内に一時あつたが、ここに移転した時に、東海区水産研究所から、研究者も一緒に移つた関係で、ここの研究員は実に若い人が多く、研

究に対してエネルギーであり、物凄いファイトで研究し、立派な研究成果をおさめている。尚昨年大きい溜池を造つて、この方面の今後の仕事の活躍が充分期待される。研究員の方々は、所長は御忙しくて、研究が出来ないのは、全く気の毒であるともらして居られた。ここの労働組合は東海区水産研究所と同じように、それ程活潑でないように見受けられたが、これは研究に専念していれば、かかる運動が手

薄になるのもやむを得ないと考えた次第で、各研究室単位に順番制にやつているとの事であつた。住



東京水産大学全景

宅の問題はここでも深刻で、先述の守衛室もやむなく職員住宅にしているとの話であつた。この現象は東海区水産研究所も同様、水産庁関係の共通な悩であるような印象を受けた。色々と話をしている内に、四囲が真暗くなつて来たので、帰路について、街燈も少ないために暗く、実に淋しい田舎道と云う感を深くした。最後に東京水産大学であるが、もと水産講習所といわれた学校で、西に越中島の水産講習所あり、

北に函館高等水産学校ありと云われた位。我国水産高等教育の双壁をなしていたものである。現在ある東京水産大学は品川駅より徒歩で約15分で着くところにある。東海道に沿つて横浜の方にやや行く中、注意しながらいかないと見逃すような汚れた標札が、道路の片隅に立つている。そこを左に折れると、直ぐ小さい堀わりに出る。その向う側は全部埋立地になつていて橋がかかっている。そこから数棟の2階建の校舎の全景が眺められる。この橋の処が一種異様な臭がするのでよく見ると、橋のもとに一本の導管があり、屠殺場の血液だとか汚物を放出しているため、海水も赤黒くなり、全く不快な感じを受けた。急いで橋を渡つて学校に行く、この学校はモルタル製の建物で、戦後アメリカ軍が接収していたにしては、案外粗雑なものであるし、現在迄アメリカ軍の後直ぐ建物の半分が自衛隊に接収されて、運動場等は日を決めて交互に使用していたとか、全く不便だつたと話していた。私は嘗てから御世話になつていた諸先生方に御会ひするためであつたが、先生の御話では今迄どうもアメリカ軍と自衛隊に縁が切れないので、研究も落付かず困ると云つて居られた。しかし今度やうやく自衛隊の入つていた校舎が接収解除になつたので、今度は広々となるからと丁度移転するのに御忙しい最中であつた。大学の校舎が立つている埋立地の反対側の東京湾沿ひには、どんどん埋立工事が進展していたが、これも東京都の人口の増加に伴ひ、段

々土地が狭くなるために埋立てなければならぬのだなと考えさせられた。大学内の各講座も、接収されているためか、何とはなしに窮屈さうで、雑然としているような印象を受けた。要するにこんな具合で十分な研究をされるのは中々大変で御気の毒だと思つた。私が伺つたのは折悪しく土曜日だつたので、色々見せて頂けなかつたのは、かえすがえすも残念だつたが、お話の中に、この学校の漁網試験室では、確か東京湾だつたと思うが、東京湾と寸分違わぬものを室内に造り、それに波も起してサバの様な魚類を放ち、各種の網をその中にたて、魚の乗網具合とか、海水に対する抵抗試験をしている事で、ことさら興味深く感じた。この先生方の御話では、北大水産学部の方が図書が完備しているので羨いとも云つておられた。あれやこれや御話を聞いている中に時間の経つのも忘れる程だつたが、私に用事があつたので、「今後は広くなつて、学校の玄関も、もつと近くなりますよ」と云われたのをもう一度思い出したところで、おいとまごいをして、横須賀にある防衛大学に一路急いだわけである。最後にこれら各所で親切に案内して頂いた方々に心から御礼を申上げて筆を止める次第である。
(調査課技官)

